

『砂埃立つ、遠き水辺で』

〔A・1〕

西日が差し込むボロアパートの二階。

部屋では女が昼寝をしている。

女、暑さに耐えかねて目を覚まし、

女

せつかくのお休みだったのに、朝からスーツで出かけて行ってしまった。「寝てていいよ」なんて、結局なんの優しさでもなく、あつ
つ……。

〔登場人物〕

女……かつて高校生だった女。実家を飛び出し男と結婚した。

男……かつて高校生だった男。小説家を目指していた。

女

洗濯をして、部屋の掃除をして、もう一回洗濯をして。気がついた
ら道の向こうの高校は、もう部活の時間……

校庭から聴こえる「ありがとうございます！」の声。

女

も、終わった。

夏の高校、放課後の校庭。

部活動も終わり、綺麗にブラシがけがされている。

ブラシがけの跡は校庭の端で丸く折り返し、砂は筋となって校庭を埋め尽くしている。

女、ジャージ姿で校庭のブラシがけを終え、一息ついている。

男、制服姿で現れる。校庭の端から、

お疲れー、

ちよつと、入ってこないで！

え？

ブラシ！

(足元を見て) あ、ああ、

今日はせっかく綺麗にかけられたんだから。

ああ、ごめん。

まあ、明日にはどうせグチャグチャになっちゃうし、別にいいんだけど。

まあ、ね。

明日体育ある？

あー、あるある。

あつそ・・・。

え、あー、ありがたく、ありがたく頂戴します、校庭。

冗談。

他の人は？

もう帰った。

おつ、そっか。

あつそ・・・。

いつも思うけど、別に手伝ってくれたって良いじゃんね。

何が？

みんな。

いや、良いよ別に。

だってブラシいっぱいあるじゃん。

そうだけど。

みんなでやれば一瞬だよ？

いいの。

だいたいレギュラーの奴のほうが広く使ってるんだから、

いいの！

・・・。

・・・。

ごめん。

・・・。

・・・。

こだわってるの。

え？

修学旅行でき、お寺行ったじゃん。

うん。

あの時に見た枯山水のお庭が綺麗だったなって思ってた。それで、

男 こう、やってみてるの（ブラシをかける動作をしながら）。

男 ……え？

女 校庭を枯山水にしてるの。

男 あー、へえ……。

女 だから、他の人とやるとダメなの。

男 なるほどね。

女 こだわってるでしょ。

男 そう思うと、綺麗だね。

女 あ、うん。

男、そつと目を閉じ、

女 ……なに？

男 ……大海原だ。

女 え、なにが？

男 音、聴いてるんだよ。校庭の海の。

女 は？

男 水なんでしょ？

女 いや、砂だし。

男 それ言ったらおしまいだよ！

女 だって砂は砂だよ！

男 枯山水って言ったの誰だよ……。

女 それは確かに言ったけど、でも音なんてしないって。

男 いや、するする、目つぶって聴いてみなよ。

女 えー、だって、

男 （口元に手を当て）しー。

女、しぶしぶ目をつぶる。

男も続けて目をつぶる。

女はしばらくすると怪訝そうに薄っすらと目を開け、男を横目で見る。

男 聴こえた？

女 あー、うん。

男 本当に？

女 すううー、って。

男 あー……それは風だね。

女 だって、

男 立派な海だと思います。

女 ……。

男 自信持ちなよ。

女 なにそれ。

男 この校庭の砂の線は枯山水をイメージしてるんです、ってそれ、お

女 前が言わなきゃ誰も分からないからね。

男 いや別にいいし、言わないし誰にも。

女 もったいない。

男 いいの。

女 ああ、あれだね、渦巻きとか、波の形とかもあるとそれっぽくて

いいね。

いやダメでしょ。

そうかな。

先生にバレたら絶対怒られるって。

美術の先生とかを味方につけよう。

美術の先生は校庭のブラシがけとか一切興味ないから。

えーじゃあ、どうするんだよ……。

どうもしないで。ほっといて。

……。

なんか、恥ずかしくなってきた。

ああ、それは本当に、ごめん。

あ、違うの、あなたは悪くない。

……。

でも、何が悪いのかもよく分からない。

……別に何も悪くないでしょ。

……。

いつこいつこ良いとか悪いとか、決めることないよ。

女、少々疲れた顔でため息をつく。

……今日は？

ああ。

この時間までいるってことは部活あったんでしょ？

まあね、聞く？

うん。

そろそろ、秋の文化祭で出す合同誌のテーマを決めようってことになって。それで、今年はSF縛りでいくことになったんだよ。

SF。

そう。やっぱなあ、男子しかいないとついそうなっちゃうよね。

確かにエッセイとか恋愛小説とかには、どう転んでもならないだろうね。

いや、やってみた時もあるんだよ、みんな練習しようぜって言うて。いやーもうね、あれは散々だったよ……。まずさ、文芸部男子五人のうち、女の人のことをちゃんと好きになったことあるのが

俺一人なわけ。

お、おお。

残り四人のうち三人は、もうどっかから引つ張ってきたような恋愛モノを書いてなんとか持ってきたんだけど、残りのやつがさー、

え、誰？

絶対内緒にする？

う、うん。

……二組の松永。

あー、はいはい。

あいつが持ってきたの読んで、俺もう友達続けられないかと思った。どんなの？

家で飼ってるメスの猫が、野良猫と交尾して子供産むまでのドキュメンタリー小説。

男 しかもちゃんと、全部尾行したらしくて、原稿出してきた時は全身傷だらけだった。

女 色々すごくて、うん、すごい……。

男 松永は「これぞ愛だ」って言うんだけど、正直ちょっと前衛的すぎて。

女 まあ、松永って変わってそうだもんね、話したこと無いけど。

男 飼猫として安全な日々を送るメス猫が、たくさんのブロック塀を超えて薄汚れた野良猫に会いに行つて、で、子種を授かって何事も無く安全な家に帰つて子供を産むけど、もうその野良猫とは会わないつていうのが、もうね、たまらないんだつて。

女 ああ……。

男 わからん。

女 あ、でも、ちょっとわかるかも。

男 え？

女 うん、わかる、なんとなく。

男 どこが？

女 なんだろう、そのオス猫との子供がいることで、メス猫にとっては

愛が永遠、みたいな……？

男 ……あ、なるほどね、ふーん……。

女 まあ分かんないよね。

男 うーん……うん。

女 いずれわかるといいね。

男 わかるかなあ、大人になると。

女 まあ、分かんなくても別にいいと思うけど。

男 そう？

女 うん。

男 ああ、なんだっけ、そう、SF縛りの話。

女 ああ。

男 ごめんね。

女 んーん。

男 で、だいたいどんなのを書こうかって相談してたんだけど、あ、

SFつて、わかるよね……？

女 ゴジラ、みたいな……。

男 うーん、それはどちらかと言うと特撮、みたいな感じかな。

女 ごめん……。

男 いやいやいや。あの、サイエンス・フィクションつていって、まあ、時空超えたり、すごい機械発明したり、宇宙行ったり、みたいなやつのことを言うのね。

女 へえ。

男 有名なだと、ウエルズの「タイム・マシン」とか、最近のだとハイラインの「夏への扉」とか、読んだことある？

女 本、あんまり読まないからなあ……。

男 結構面白いから今度読んでみてよ、俺色々持ってるから。

女 ああ、うん。

男 それでまあ、SFつていうジャンルがありまして、俺らはそれを書くんことになりまして、で、何書こうかねって相談してて。二人は

宇宙、一人はロボット、

女 松永は？

男 あいつは、なんか小さくなる、って言った。

女 へ？

男 松永、先週「ミクロの決死圏」観たらしいんだよ、多分そのせいだ
女 と思うんだけど……。

女 小さくなって、体の中はいっちゃんやつでしょ？

男 そうそう！え、「ミクロの決死圏」は知ってるの？

女 この前ポスター見た。

男 なるほどね。え、観た？

女 観てない。

男 俺も観てないんだよ、今度行こうよ。

女 え、私？

男 あ、うん、え、ダメ？

女 ああ、いいよ。

男 よかった。

女 その、なんだっけ、

男 「ミクロの決死圏」？

女 そう、それもSF？

男 そうそう。

女 何となく想像ついてきた。

男 で、俺がさ、ちよつと迷っちゃってて。

女 え、なんか珍しいね、迷ってるなんて。

男 いやそうなんだよ。やりたいことはいくつかあるんだけど……あ、

女 ちよつとさ、今からいくつか話すから、どれが面白そうか教えて

男 くない？

女 え、いや、全然分らないと思うけど、

男 大丈夫大丈夫、こういうのは予備知識が無い人が聞いても面白い

女 やつが一番良いんだから。

男 はあ……。

男 じゃあ、まず一個目ね。タイムマシンで自由にいろんな時代を生き

来できるようになった二〇xx年。主人公は自分が死ぬ瞬間を見る

ためにタイムマシンで未来に行こうとするんだけど、何度乗っても

現在に送り返されてしまう。おかしいなと思っていると、自分の

家族がタイムマシンの前で泣き始め、実はタイムトラベルに失敗

して肉体は死んでいて、それに気づかず魂が何度もタイムトラベル

をしていた、っていう。

女 ……。

男 どう？

女 それは、SFなの？

男 タイムマシンが出てくるからSFだよ、多分。

女 なんかSFっていうよりホラーって感じ。っていうかタイムトラベ

ル失敗してるし。

男 安易なタイムトラベルをする未来への警鐘だね。

女 うーん……。

男 あんまり？

女 うん。

男 そっか……。

女 ……次は？

男 うん、次は宇宙モノ。人類が月に到達したそう遠くない未来の話。

宇宙船は月でのミッションを終えて地球に戻る途中でトラブルに見舞われ、地球との通信も途絶えてしまう。真つ暗な宇宙空間を漂ううち、見たことも無い惑星を見つけて宇宙船は不時着するんだけど、そこは酸素と重力以外は何も無い不毛の地で、宇宙船の乗組員は力を合わせて何とか生きていこうとする、っていう。

……

どう？

ああー。え、それ、乗組員って男しかないの？

うん。

それ、終わり見えてるよね。

え、なんで？

だって、女のいなきや繁殖できないから。

ああ……、あ、でも乗組員に女がいたら繁殖できるってことか。

だいぶ生々しい方向に行くとは思うけどね。

いいんだよ、松永だって猫の繁殖書いてるんだから。

それは猫じゃん。

まあでも、打開策はありそうだな。ただ、五人中三人が宇宙モノ

だとなあ、

ちよっとね。

うん。

三個目は？

ああ、うん、三個目は、

遠くから、女の友達が大声で、

友達

よっちゃーん、帰んないのー？

と、呼びかけてくる。

男、急にそわそわして女から少し離れる。

女、少し迷ったあと、

ごめーん、先帰っててー！

はいよー！

え、良かったの？

ああ、うん。

ごめんね、なんか。

だって話終わってないでしょ。

まあ。

で、三個目は？

ああ、うん。三個目はクローンの話。

おお。

主人公の男が、自分を振った女の遺伝子を使って、そっくりのクローンを作るのね。それでまた、前と同じように一緒に暮らし始めるんだけど、ある日クローンの女とオリジナルの女がばったり出会ってしまう。ショックを受けた女は、腹いせにその男の遺伝子でクローンを作って、一緒に暮らし始める。二人とも相手を求め合っているのに、既にクローンを作ってしまったせいで、結局はそれぞれのクローンと住み続けなければならない、っていう。

女

お、おお……。

男 どう？

女 切ないね……。

男 そうだねー。

女 でもこれは、ちょっと面白そう。

男 本当に？

女 安易なクローンづくりをする未来への警鐘だね。

男 (笑いながら) おい。

女 でも本当に、ありだと思うよ。書いてみたら？

男 お、よっし。

女 他には？

男 あとはね、

女 このあと、あなたはさらに3つもお話をしてくれた。

男 二人が話していると、最終下校のチャイムが鳴る。

女 気がつけば、陽もさつきより傾いている。

男 あー、結構話してたね、ごめんね。

女 んーん。

男 とりあえず、ちょっと書いてみるわ。

女 うん。

男 出来上がったらまた持ってくる。

女 あ、うん、え、私読んでわかるかな……。

男 だから、予備知識無い人が読んでも面白いのが一番いいんだって！

女 そうだけど……。

男 まあ、俺が面白いの書けなきゃ、そもそもどうしようもないんだけどね。

女 それは、頑張ってる。

男 うん。

女 ……ぼちぼち帰る？

男 そうだね。

女 この後は？

男 予備校。

女 え、間に合うの？

男 まあ、遅れても、ね。

女 いやダメでしょ。

男 この暑さじゃやる気出ないよ。

女 そりゃそうだけど……まあ私、関係ないし。

男 働くところ決まった？

女 うーん、まだ。っていうか、別にどこでもいい。

男 なんで？

女 なんで、って、そもそも働きたくないし。

男 主婦にでもなるの？

女 結婚してませんけど。

男 知ってます。

女 酷い。

男 冗談だよ。

女 はあ……。

男 え、ごめんごめんごめん。あー、ほら、なんか無いの、好きなこと

女 ……ない。本当にない。
 男 ご趣味は？
 女 睡眠。
 男 布団屋とか？
 女 布団屋勤めでも寝られるわけじゃないから。
 男 好きな食べものは？
 女 蟹。
 男 ああ、じゃあ港の蟹缶工場は？
 女 ええ、やだやだ、一生指先が磯臭くなっちゃう。
 男 でも大好きな蟹だよ？
 女 布団屋で働いても寝られないし、蟹缶工場でも蟹は食べられない。
 男 正論をありがとう。
 女 うるさい。
 男 でもあそこ、求人出てたよね。
 女 知ってる……。え、なんで知ってるの？
 男 え？あー、何のお仕事があるのかなー、って見てただけ。
 女 あんた関係ないじゃん。
 男 興味だよ、興味。
 女 大丈夫だよ、東京はもつといろんなお仕事あるんだから。
 男 そりゃそうだけど。
 女 はあ……。
 男 でも、大学出ても別に就職しないし。

女 ……は？
 男 うん。
 女 え、どうするの？
 男 うーん……。なんか、小説書こうかなって。
 女 え、あー、おお。
 男 え、なんか変なこと言った？
 女 いや、言っていない言っていない。言っていないけど、へえ……。
 男 ダメ？
 女 いや、ダメじゃないけど、え、親とか知ってるの？
 男 言えるわけじゃないでしょ、さすがに。どうせ銀行とかで働くと思っ
 てるんじゃない？知らないけど。
 女 まあ、そうだよな。
 男 っていうか、初めて言った。
 女 ……。
 男 だから内緒ね。
 女 ……わかった。
 男 ……帰る？
 女 ああ、じゃあ私、着替えてくる。
 男 うん。
 女、ジャージを着替える為、校舎へ入っていく。
 男、女を見送ると、どこかへ消える。しばらくすると、男はほろ
 きと大きな石を重そうに持ってきて、石を校庭に置く。
 女、着替えを終えて帰ってくる。

女 ごめん、お待たせ・・・何やってんの!?

男 庭石!

女 ちよつと、バカ言わないでよ!え、あんた持ってきたの?

男 あっちの花壇のやつ。

女 はあ!?

男 枯山水なんでしょ?

女 いや、校庭だし。

男 お前が信じなきゃ誰が信じるんだよ。

女 うるさい、え、早く戻ってきてよ。

男 何で?

女 怒られるから!

男 嫌だー。

女 嫌じゃない!

男 いいからこつち来なよ。

女 えー、もー・・・。

女、ブラシがけた校庭に出来るだけ足跡を残さないようにしながら、男に近づく。

男 この広さじゃあと10個あっても足りないな。

女 はあ・・・。

男 (手に持っていたほうきを女に差し出し) ほら。

女 ...?

男 周りに、グルグルって、書いて。

女 ねーもう、ほんと、怒られるから。

男 多分これ、お前一人じゃ持ち上がらないよ。

女 えっ、

女、石を持ち上げようとするも、びくともしない。

女 はあ・・・。

男 降参?

女 降参降参。早く戻して。

男 いやー、暑いなあ。

女 ねえ!

男 じゃあ、書いて。書いたらいいよ。

女 (しぶしぶほうきを受け取り) 絶対だからね。

男 うん、だから頑張って、枯山水。

女 もー・・・。

女、ほうきの柄で石の周りに渦巻きのような線を書き始める。
男はしばらくそれを見ているが、やがて遠ざかっていく。

女 こんな感じかなあ?

男 っ、もうちよつと書いてもいいんじゃない?

女 んー・・・。(また何周か円を書いて) どう?

気が付くと、男はどこにもいない。

部屋では、女がぐったりとへたり込んでいる。
外は既に薄暗い。

しばらくすると、スーツ姿の男が帰ってくる。

男 ただいまー。

女 おかえり。

男 ……どうしたの？

女 どこ行ってたの？

男 ……

女 ……

男 職安。

女 ……

男 ごめん、相談も無しに。

女 就職でもするの？

男 うん。

女 ふーん。

男 なんか、さすがにもうね、いい歳だし。

女 ……何それ。

男 だって、疲れたでしょ？毎日毎日俺のために働いて、休みの日だっ
て遊びに連れて行ける金は無いし、親にも勘当されてさ、

女 ……誰があなたの為に働いてるって？

男 ……

女 私、あなたの為に働いてるって、言ったことある？思いつがるのも

いい加減にしてよ。私は私の為に働いてるんだよ。私がこの生活を

したいと思ってるの。なのに何、いい歳だしって、何それ。

男 ……

女 私、あなたが小説書いていることに一回でも文句言ったことある？

男 ……無いです。

女 無いよね、だって文句なんて一つも無いから。

男 ごめんなさい。

女 私はただ私がしたいことをして、いたいところにただいだけなの。
だからあなたも、そうすればいい。その先が就職なら別になんだっ

て構わないけど、そうしたら私だって、行きたい所に行く。

男 ……

男 気が付くと、外は原稿用紙の雨が降っている。

男 あ、雨、

女 あー…流れていっちゃう。

男 何が？

女 ……枯山水。

男 ……ああ。

女 あの石、どうしたんだっけ。

男 石？あー、どうしたんだっけね。

女 ……

男 ああそう、あのあと校庭のスプリンクラーで、線が全部消えちゃっ

女 たんだよ確か。俺もお前もびしょ濡れになっちゃって……。それで、石も頑張って戻した気がする。
女 そっか、そうだった気がする。

二人、窓の外を見つめ、

男 ああ、洗濯物、俺やる、

女 いや、今日は。

男 ……。

女 ねえ、お話して。

無断複製・転写を禁じます。

作品に関するお問い合わせ、上演許可等につきましては、カミグセ (info@kamiguse.com)までお問い合わせください。